

遠洋トロールに関する研究座談会

主 催 日本トロール底魚協会・水産海洋研究会

日 時: 昭和 53 年 7 月 10 日 (月) 13:30~17:00
会 場: 海洋水産資源開発センター会議室
コンピナー: 高 橋 武 伸 (日本水産 K K)

話題および話題提供者:

1. 深海丸によるインド洋南西部海域トロール調査結果の概要…鈴木春彦 (海洋水産資源開発センター)
2. インド洋ケルゲレン諸島海域の海洋観測結果……中尾 徹 (千代田ディムス・アンド・ムーア(株))
3. 深海丸によるアルゼンチン沖調査結果—予報 (第 1, 2 次航海) ………畑中 寛 (遠洋水産研究所)

1. 深海丸によるインド洋南西部海域トロール調査結果の概要

鈴 木 春 彦 (海洋水産資源開発センター)

深海丸は昭和51年までのニュージーランド海域の調査に続いて昭和52年度はインド洋南西部海域のトロール調査を行った。筆者はこの調査の後半に調査員として乗船したのでその結果の概要を報告する。

1. 調査期間と海区

深海丸は昭和52年4月22日宇野港を出港し、5月16日から昭和53年3月27日まで調査を行い、4月1日ブエノスアイレスに入港した。調査した海区は第1図(1)(2)に示したようにサヤデマルハバンク、マダガスカルバンク、イーストマリオンバンク、クロゼー諸島沖、オビ・レナバンク、ケルゲレン諸島沖および、ケープタウンでドック入渠後ブエノスアイレスへ向かう途中調査したデスカバリー海山、R. S. A. 海山群とプロムレイプラトウである。

2. 漁 獲 量

調査期間中の漁獲量は第1表に示したように全部で2,238トンであった。最も多かったのはミナミスズキで620トン、総漁獲量の28%を占めた。次いでミナミアイナメ(456トン)、アジ(318トン)、コオリカマス(278トン)、ミナミツツ(256トン)等が主なものであった。1日当りの漁獲量は13.6トンで、深海丸が昭和50年に調査したニュージーランド海域の27.3トンに比べると約半分であった。

3. 各海区の調査結果

(イ) サヤデマルハバンク

冬期間南部海域の気象条件が悪化するので、これを避けて8月末から11月上旬の間に2航海調査した。調査した水深は200m以浅で、バンク頂部の水深70~120mを主に曳網した。漁獲物はアジ(尾叉長約15~25cmのムロアジとマアジ)が317トンで総漁獲量529トンの60%を占め次いでエソ(尾叉長約30~40cm)が136トン、イトヨリが37トンであった。その他にカマスが7トン、キレンコが6トン漁獲された。アジやエソは水深80~100mで主に漁獲され、キレンコは110~130mで多くとられた。

(ロ) マダガスカルバンク

このバンクは水深200m位の浅いバンクであるがバンク頂部は海底が荒く底びきは出来ない、またバンク斜面は水深600m位まで急峻で曳網不可能であり、操業は主に700m以深で行われた。漁獲量は7トンで、うちハマダイが2トン(34%)、ツボダイが2トン(28%)であった。ハマダイはバンクの頂部で漁獲され、ツボダイは水深700m台で漁獲された。

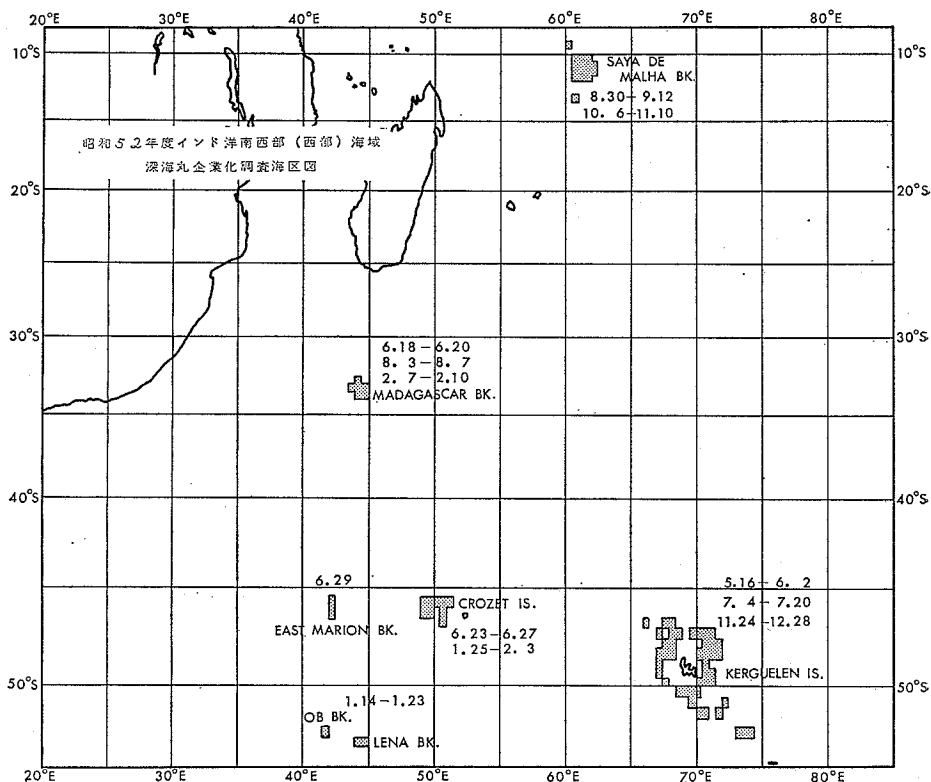
(ハ) クロゼー諸島沖 (E. マリオンバンクを含む)

この海域は6月下旬6日、1月下旬~2月上旬10日間調査し、前期は8トン、後期は310トンの漁獲量があった。主な漁獲物はミナミツツが196トン、ミナミアイナメ119トンでこの両種で総漁獲量318トンの99%を占

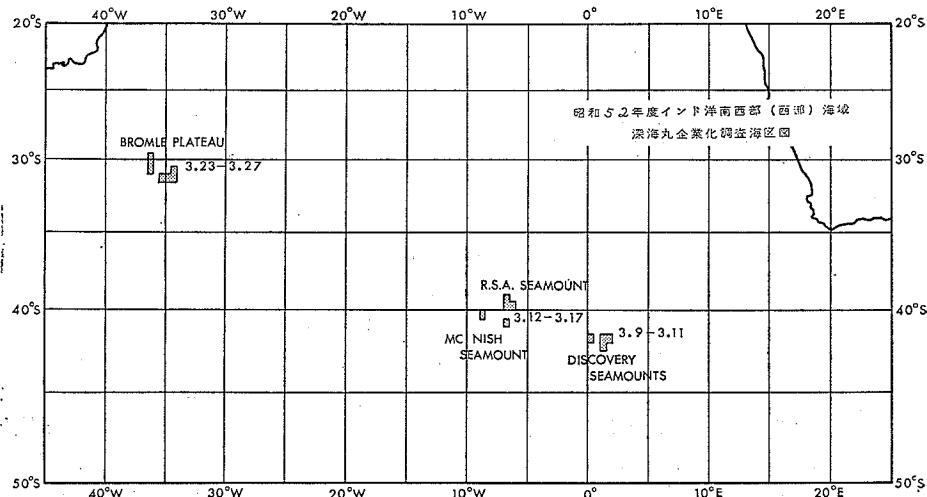
遠洋トロールに関する研究座談会

めた。ミナミアイナメは水深 240~270 m で多獲され、
体長 20~30 cm のものが多かった。ミナミツツは水深

330 m 付近に多く、体長は 30~50 cm であった。イー
ストマリオンバンクでは6月29日に水深 260 m 付近を



第1図-(1)



第1図-(2)

第1表 深海丸の海区別魚種別漁獲量（ミール原魚分を除く）

（単位：トン）

海 区	サヤデ マルハ バンク	マダガス カルバ ンク	クロゼー 諸 島 沖	オビ・レ ナバンク	ケルゲレ ン諸島沖	デスカバ リー海山	R. S. A. 海 山 群	ブロムレ イプラト ウ	合 計
操 業 日 数	46	12	16	10	67	3	6	5	165
有 効 網 数	233	39	67	43	289	6	22	10	709
ミナミスズキ			2.4	1.3	616.7				620.4
ミナミアイナメ			119.3	144.3	192.2				455.8
ア ジ	317.0	0.8							317.8
コオリカマス					278.4				278.4
ミナミムツ			196.0	3.1	57.2				256.3
エ ソ	135.5								135.5
コオリウオ					82.7				82.7
イトヨリ	37.0								37.0
そ の 他	39.8	5.8			1.6	0.2	6.7		54.1
計	529.3	6.6	317.7	148.7	1,228.8	0.2	6.7	—	2,238.0
曳網60分当り 漁 獲 量	0.8	0.0	2.2	1.7	1.9	0.0	0.0	—	—

2回曳網したが、漁獲は皆無に近かった。

(イ) オビ・レナバンク

このバンクはオビバンクとレナバンクに分かれている。オビバンクでは1月14日3回曳網し、ミナミアイナメ主体で0.7トンの漁獲があっただけで、海底が荒いために調査を打ち切った。レナバンクでは40回の操業で149トンの漁獲があった。主な漁獲物はミナミアイナメで144トン、総漁獲量の97%を占めた。ミナミアイナメは水深400~410mに多くみられ、体長25~40cmの産卵群であった。

(ロ) ケルゲレン諸島沖

この海区は全調査海域の中で最も広く、期待された海区で5月中旬~6月上旬、7月上旬~中旬、11月下旬~12月下旬の3回にわたって重点的に調査された。海区の総漁獲量は1,229トンで、第1次の調査では330トン、うちコオリカマスが264トンで80%を占めた、第2次航海には124トンの漁獲があり、うち100トン(81%)がミナミスズキであった。11月~12月の第5次航海には775トンの漁獲があり、うちミナミスズキが482トン(62%)、ミナミアイナメが191トン(25%)、コオリウオが55トン(7%)であった。第1次航で多獲されたコオリカマスは水深200mで獲られ、体長は25~35cm程度のものであった。第5次航で漁獲されたミナミスズキは水深240m付近に多く、体長は50~60cm位であった。ミナミアイナメの漁獲水深は320m位で体長は40~50cm位のもので主群であった。ケルゲレンではコオリカマスの稚魚がハダカイワシ、オキアミ等と共に他の魚の餌料になっている傾向がみられた。

(ハ) 大西洋南部海山群とブロムレイプラトウ

この海区の調査はブエノスアイレス回航途中に14日間行なったが、R.S.A.海山群(マクニッシュ海山を含む)でアラカブ、アカウオ、アカイサキ等を7トン程度漁獲しただけであった。デスカバリー海山ではソコダラ類が若干みられ、ブロムレイプラトウでは漁獲皆無であった。

4. ま と め

今年度行った調査の概要をまとめると次のようにいえる。

(1) インド洋南西部海域のうち今年度調査した島嶼周辺の陸棚、バンクおよびこれらの斜面の各々は漁場価値に大きな差がある。

(2) 南部海域は周南極海流の影響下にあるためクロゼー諸島沖とオビ・レナバンクではノトセニア類が中心で、ケルゲレン諸島沖ではノトセニア類とコオリウオ類の魚種が主体となった。これら南部海域は調査した各海区の中では最も漁場価値が高く、曳網60分当り漁獲量はクロゼー諸島沖で2.2トン、ケルゲレン諸島沖で1.9トン、オビ・レナバンクで1.7トンであった。

(3) 南部海域について漁場価値が高かったのはサヤデマルハバンクである。この海区は南西季節風海流の影響で水温が高く漁獲される魚種はアジ、エソおよびイトヨリなどが中心になる。曳網60分当り漁獲量は0.8トンで、ケルゲレン諸島沖の42%であったが漁獲の主体を占めたアジが南部海域のノトセニア類等と比べて商品価値が高いため相対的に漁場価値が高いといえる。

(4) 調査したその他の海区はいずれも漁場価値が著しく低い。